

# 外来語としての「アルファベット」の発音

「アルファベット」に関連して2つの問題を取り上げた。

1. 「アルファベット」A, B, C, D, …Zを外来語として読む場合の発音
2. 「アルファベット」を使った省略語を画面に示す場合どのように示すべきか(例: vs.かvsか)

今回の議論によって、「アルファベット」の読み方を確定したり、表示方法を決めたりするとうわけではない。

放送で「アルファベット」を使う場合の問題点を整理し、NHKの考え方をまとめるための議論である。

## 1. 「アルファベット」A, B, C, D, …Zを外来語として読む場合の発音

### 1-1 問題点

最近、放送現場から用語班に寄せられる問い合わせで、「アルファベット」に関連するものが多い。中でも多いのは、「A, B, C, …」といった個々の「アルファベット」を外来語として発音した場合にどのように読めばよいかというものである。

例えば、「5W1H」「WHO」はどのように読むのかという問い合わせである。

「W」は「ダブリュー」という英語的な語形のほかに、日本語では「ダブル」という語形も考えられる。また、場面によって「ダブリユ」となる場合もある。「H」は英語的な「エイチ」という語形がいいのか、日本語で一般的に使われる「エッチ」がいいのか。また、語の中では「エチ」と発音されることもある。このように個別の「アルファベット」にはいくつかの語形が考えられ、放送ではどれを使えばいいのかという疑問が生じる。

日本語で「アルファベット」を読む場合、必ず

しも英語などの原音に近い語形にはならない。「V」は、英語の原音では「ヴィー [vi:]」だが、日本語では「ブイ」となることが多い(例: VHS, VRなど)。また、「Z」はイギリス英語では「ゼッド [zed]」、アメリカ英語では「ズイー [zi:]」だが、日本語ではほとんどの場合「ゼット」である(例: ももいろクローバーZ, マジンガーZなど)。

また、英語の原音に近い語形が使われることがあっても、それも日本人が発音しやすい形に変えて使われる。「A」は英語では [ei] だが、日本語では [e:] に近く発音されることが多い。「A級」という語の場合、「永久」と同じ「エークュー」という発音になる。このほか、「C」は英語のように [si:] (カタカナで書くと「シー」に近い発音)と発音するのではなく、多くの場合 [ji:] (「シー」)に近く発音される。また「N」は、英語では [en] (「エン」)と母音をつけない発音が基本だが、日本人は母音をつけて「エヌ」と発音するのが一般的である。

こうした「アルファベット」が放送で出てきたときに、どのように読めばよいのかという問題は、放送用語委員会で具体的に話し合われてきたことはなかった。放送現場からの問い合わせも増えていることから、放送で使う場合に、どのような読み方が考えられるのか、これまでの資料を示し、議論することにした。

### 1-2 外来語の発音と表記

NHKでは、外来語の場合、発音と表記を一致させることを原則にしている。

外来語をどう書き表すかについては、1991年に「外来語の表記」が内閣告示され、考え方が示された。この「外来語の表記」は、外来語をカタカナでどう書き表すのかを示しており、その表記をどう発音するのかについての言及はない。一般には、必ずしも外来語は発音のとおり表記しているとは言えない。例えば「computer」のカタカナ

表記で「コンピュータ」となることがあるが、こう書かれていても発音は「コンピューター」に近くなることもある。放送では、こうした発音と表記の不一致をできるだけなくし、外来語のカタカナ表記は発音に合わせることを原則としている<sup>1)</sup>。

特に注釈しないかぎり、本稿に示すカタカナは発音と表記両方を示すものとする。

### 1-3 どういう発音が考えられるか

AからZまでの外来語としての発音はどのようなものが考えられるかを一覧にした(表1)。NHKの放送で使う語形として優先されると考えられるものに◎をつけた。なお、「エー」に対しての「エイ」、「ジェー」に対しての「ジェイ」、「ケー」に対しての「ケイ」は発音の幅として認められる

ものと考え、△とした。

なお、場面によっては使われることがあるが、放送では使わないと考えられる語形は無印とした。

### 1-4 これまでの検討 (NHK)

用語班で、単独の「アルファベット」の語形について決めているのは「H」と「X」だけである。「H」は『NHKことばのハンドブック第2版』(NHK出版・2005(最新刷りは第15刷)、以下『ハンドブック』)に「エイチ」として立項があり、用例として「HB(エイチビー)」「pH(ピーエイチ)」が示されている。また、「X」は『日本語発音アクセント新辞典』(NHK出版・2016、以下『アクセント新辞典』)に、「エックス」で立項されている。これらのほかに、用語班の資料で「アルファベット」

表1 A～Zの考えられる語形

	発音・表記		備考
A	◎エー	△エイ	語によるが、原音 [ei] は長母音を原則とする <sup>2)</sup>
B	◎ビー		表記「ビィ」(発音:「ビー」)が使われることがあるが、イ列の長音は長音符号で示すのが原則 <sup>3)</sup>
C	◎シー	スィー	表記「スィー」(発音:「シー」)あるいは発音も表記も「スィー」である場合もあるが、NHKの放送では「スィー」を発音・表記ともに推奨していない <sup>4)</sup>
D	◎ディー	デー	一般的には「ディー」
E	◎イー		
F	◎エフ		
G	◎ジー		
H	◎エイチ	エッチ	「エッチ」は俗語としての使用とする国語辞典が多い。「エーチ」「エチ」などの語形も考えられるが、単独では使われない発音として表には示さなかった
I	◎アイ		
J	◎ジェー	△ジェイ	語によるが、原音 [ei] は長母音を原則とする
K	◎ケー	△ケイ	語によるが、原音 [ei] は長母音を原則とする
L	◎エル		
M	◎エム		
N	◎エヌ		
O	◎オー	オウ	原音 [ou] は長母音を原則とする。「(食器) ボウル」は表記は「ボウル」だが発音は「ボール」 <sup>5)</sup>
P	◎ピー		
Q	◎キュー		
R	◎アール		
S	◎エス		
T	◎ティー	テー	一般的には「ティー」
U	◎ユー		
V	◎ブイ	ビー	原音 [vi] は、カナ表記では「ヴィー」としてもいいが、発音は「ビー」でかまわない <sup>6)</sup>
W	◎ダブリュー		一般には「ダブル」と読まれることがあるが、誤用がもとになった読みであり、ここには示さない
X	◎エックス		古くは「エッキス」「エクス」などの読みも使われたが、現在は「エックス」
Y	◎ワイ		
Z	◎ゼット	ズィー	アメリカの発音に近い「ズィー」(表記「ズィー」、発音:「ジー」)あるいは表記も発音も「ズィー」も使われることがあるが、NHKの放送では「ズィー」を発音・表記ともに推奨していない <sup>7)</sup>

の単独の読みについて明記するものは見あたらないが、「アルファベット」を使った語については、いくつかの資料がある。

第678回放送用語委員会(1968.12.12)で、外国の新聞・雑誌名や放送局名の略称を、それぞれの国のアルファベットの読みで読むことを基本にすることが決められた。例えば、「NRF(フランスの雑誌名)」は「エヌ・エル・エフ(×エヌ・アール・エフ)」となっている。しかし、現在、すべてがこの決定のとおりになっているわけではなく、慣用に従うものも多い。なお、この場合の「それぞれの国のアルファベットの読み」とは、原音に近く発音するというのではない。それぞれの国の発音をもとに日本語化した外来語としての発音を用いるということである。

このほか、用語班の古い資料には、「ABC」の読み方や、コールサインを読む場合の注意が記されているものがある<sup>8)</sup>。こうした資料によると、コールサインは「(英語の)原音に近く発音する」とされているが、この「原音に近く発音する」ということについては、石野博史(1981)に、「外国語の発音はなるべく原音に近くというのがラジオ時代のNHKの方針であり、当時は「NHK」もなるべく[en eitʃ kei]と発音するようという指導がなされていた。しかし、テレビ時代に入って、画面に出す文字との対応ということが重視されるようになり、外来語・外国語はおおむねカナによって表記されたとおりに発音するのが普通になった。アルファベットの読み方だけを必要以上に原音風にするというのも不自然である。現実にはアルファベットの読み方は、人により多少マチマチになっているのではないかと思う」と説明されている。

なお、現在、コールサインがどのように読まれているかを確認したところ、「JOVK」(NHK函館放送局)、「JOZK」(NHK松山放送局)は、「ヴィー」「ズィー」などの英語の原音に近い発音を使わず、「ブイ」「ゼット」と、日本風に発音している(YouTubeで筆者確認)<sup>9)</sup>。

また、『アクセント新辞典』『ハンドブック』で「アルファベット」の読みが付されているものもある。ニュース原稿にアナウンサー用に読みがつけられていたものも含めて表2に示す<sup>10)</sup>。ニュース原稿の用例には\*印をつけた。

「アルファベット」を使った語を放送で使う場合

表2 「アルファベット」を使った語の発音

アルファベット	語
A	A級(エーキュー), A級戦犯(エーキューセンパン), ATM(エーティーエム), A面(エーメン)
B	BS(ビーエス), BSE(ビーエスイー), B-CASカード(ビーキャスカード), B級(ビーキュー), BGM(ビージーエム), B判(ビーパン)
C	CATV(シーエーティーブイ), CM(シーエム), cc(シーシー), CD(シーディー), CTスキャン(シーティーエスキャン), CD-ROM(シーディーロム), *CG(シージー)
D	3DK(サンディーケー), 2DK(ニディーケー, ニューディーケー), DNA(ディーエヌエー), DK(ディーケー), DDT(ディーディーティー), DV(ディーブイ)
E	EU(イーユー), eラーニング(イーラーニング), *Eメール(イーメール)
F	FM(エフエム), F1(エフワン)
G	GNP(ジーエヌピー), Gメン(ジーメン), G5(ジーファイブ), G7(ジーセブン), G8(ジーエイト), G10(ジーテン)
H	*H2A(エイチニエー)
I	IATA(アイエーティーエー), IC(アイシー), ICAO(アイシーエーオー), ICレコーダー(アイシーレコーダー), ISO(アイエスオー), IT(アイティー), IDカード(アイディーカード)
J	JR(ジェーアール), Jリーグ(ジェーリーグ)
K	K2(ケーツー)
L	LED(エルイーディー), LSD(エルエスディー), LCC(エルシーシー), LTE(エルティーイー), LP(エルピー), LP盤(エルピーパン)
M	MRI(エムアールアイ), MRSA(エムアールエスエー), MP(エムピー), MBA(エムビーエー), MVP(エムブイビー)
N	NHK(エヌエイチケー), NG(エヌジー), NGO(エヌジーオー), NPO(エヌピーオー), NRF(エヌ・エル・エフ)
O	O-157(オーイチゴナナ), OS(オーエス), OL(オーエル), OK(オーケー), OG(オージー), OB(オービー)
P	PR(ピーアール), pH(ピーエイチ), PM25(ピーエムニーテンゴ), PKO(ピーケーオー), PTA(ピーティーエー), PTSD(ピーティーエスディー)
Q	*Q&A(キューアンドエー), *Q太郎(キュー)
L	*ワゴンR(アール), *ヨーグルトR-1(アールワン)
S	SNS(エスエヌエス), SF(エスエフ), SFX(エスエフエックス), SL(エスエル), SOS(エスオーエス), S波(エスハ), SP(エスピー)
T	Tシャツ(ティーシャツ), T字路(ティージロ), TGV(ティージーブイ), TPO(ティーピーオー), TPP(ティーピーピー)
U	UFO(ユーエフオー), UHF(ユーエイチエフ), URL(ユーアールエル), USB(ユーエスピー)
V	VHF(ブイエイチエフ), Vサイン(ブイサイン), *Vリーグ(ブイリーグ)
W	*Wリーグ(ダブルユーリーグ)
X	X(エックス), X座標(エックスザビョー), X軸(エックスジク), X線(エックスセン)
Y	Y字路(ワイジロ)
Z	*Zランク(ゼットランク), *フェアレディZ(ゼット), *ももいろクローバーZ(ゼット), *Z会(ゼットカイ), *Z2(ズィーツー・宇宙服), *CR-Z(シーアールズィー), *Z(ゼット)

には、「アルファベット」で書き表すため、テレビ画面にカタカナで読みを書き表すことはほとんどない(会社名「DeNA」は「ディー・エヌ・エー」と示すなど例外はある)。ただし、『手話ニュース』<sup>11)</sup>は、画面表示の情報に出てくる漢字と「アルファベット」にすべて読みがなをつけて、次のように示している。

エヌエイチケイ ビービーエイビー ピーティーエイ ティービービー  
NHK PPAP PTA TPP

## 1-5 これまでの検討(国)

第17期国語審議会の第3回総会で「外来語表記委員会」の意見が次のように紹介されている<sup>12)</sup>。「JR」とか「NHK」のようなローマ字表記が目につくが、これについてはどう位置づけるか。我々の外来語の中に入れるかどうか、これらをどう発音するかは問題になるのではないか。ローマ字で

書いたものを日本語として発音するのにどうするかという問題がある。それについては、⑩「A」から「Z」までの文字を片仮名でどう書くか。「エイ」と書くか、「エー」と書くかということを決めておけばよいのではないかというような御意見が出た。しかし、結局、「外来語の表記」には個々の「アルファベット」の読みは示されなかった。

## 1-6 国語辞典の掲載

発音・表記で問題のありそうなA, H, J, K, V, W, Zについて、国語辞典にどのように立項されているかを見る(表3)<sup>13)</sup>。A, J, Kは「エー」「ジェー」「ケー」、Vは「ブイ」、Wは「ダブリュー」、Zは「ゼット」という立項がほとんどである。「H」については、「エッチ」を主な見出しにとっている辞書が多い。

表3 国語辞典の立項

アルファベット	立項	辞書	メモ
A	エイ	(三国), (大辞林)	三国:「エー」の項目に「エイ」を注記/大辞林:「エー」の項目に「エイ」も示す。それぞれ、「エイ」の立項はなし/新明解イク:「A」の立項はないが、「ABC」の発音に「エイビーシー」も示す
	エー	日国, 大辞林, 三国	新明解イク:「A」のみの立項なし。Aが含まれる語の発音は「エー」になっているが、「ABC」だけは「エイビーシー」と「エイビーシー」
H	エイチ	(日国), (大辞林), (明鏡), 三国 <sup>14)</sup>	日国, 大辞林, 明鏡:「エイチ⇒エッチ」/三国:「えんぴつの芯のかたいことをあらわす記号」「ヒップ(=しりまわり)の略字」「(看板などで)時間」の意味
	エーチ	なし	
	エッチ	日国, 大辞林, 新選, 明鏡, 新明解, 新明解イク, (三国)	三国:「性的で、いやらしいようす」の意味の語は別立項で「エッチ」のみ/新明解, 新明解イク:「エイチの俗な発音」と説明があるが、「エイチ」の立項なし/岩波:「H」のみの立項なし。「HIV」「HP」の立項があり、主見出しは「エッチ〜」、空見出しとして「エイチ〜」
J	ジェイ	(岩波), (三国)	岩波, 三国:「ジェー」の項目に「ジェイ」とも。ただし「ジェイ」の立項なし
	ジェー	日国, 大辞林, 岩波, 三国	明鏡, 新明解, 新明解イク:「J」のみの立項はないが、Jを使った語はいずれも「ジェー」で立項
K	ケイ	(大辞林), (三国)	大辞林:ケイ⇒ケー/三国:「ケー」の項目に「ケイ」の注記。ただし「ケイ」の立項なし
	ケー	日国, 大辞林, 明鏡, 新明解, 三国	岩波, 新選:「K」のみの立項なし。Kを使った語はいずれも「ケー」の読み
V	ブイ	日国, 大辞林, 新明解, 三国	日国:「ブイ」の項目に「ヴィ、ヴィー」も。ただし「ヴィ」「ヴィー」の立項なし/岩波, 新選, 明鏡, 新明解イク:「V」のみの立項なし。Vを使った語はいずれも「ブイ」
	ビー	なし	
	ヴィー	(日国)	
W	ダブリュー	日国, 大辞林, 明鏡, 新明解, 三国	岩波:「W」のみの立項なし。Wを使った語はいずれも「ダブリュー」の読み/新選:「W」のみの立項なし。「WHO」「WC」「W杯」は「ダブリュー」, 「WWW」は「ダブルダブルダブル」/新明解イク:「W」のみの立項なし。「WC」で立項。「ダブリューシー」「ダブリューシー」の発音
	ダブル	(三国)	三国:「ダブリュー」の項目に「ダブル」の注記
	ゼッド	なし	
Z	ゼット	日国, 大辞林	明鏡, 新明解, 三国, 岩波, 新選:「Z」のみの立項なし。Zを使った語がいずれも「ゼット」の読み
	ジー	なし	

## 1-7 学校教育

### 1-7-1 ローマ字教育の場合

「国語」の授業でローマ字を教える際、「アルファベット」をどのように発音しているのだろうか。現在、ローマ字は小学校3年で習うことになっている。現行の学校教科書および教師の指導書で、「アルファベット」の読みを示しているものを見つけることはできなかった。部分的なものでは、2014年に検定され、現在小学校で使われている学校教科書の中で、『ひろがる言葉 小学国語 3上』（教育出版）に、「日本語の言葉はA（エー）からZ（ゼット）までの文字を使って、ローマ字で書き表すことができます」という記述が見られる。

小学校のローマ字指導のもとになっているのは『小学校ローマ字指導資料（初等教育研究資料第24集）』（1960）だが、ここにも個々の「アルファベット」の読みは示されていない。ローマ字教育で「アルファベット」の読み方が指定されていないのは、ローマ字教育は英語などの外国語教育の前提として行われるものではないという考え方があったからのようなようだ<sup>15)</sup>。

ローマ字教育に関連した資料で「アルファベット」の読み方が示されているのは、1900（明治33）年の「羅馬字書方調査報告」（文部省（1955）に収録）である。「文字ノ呼び方及順序」として、以下のような読みが示されている。

アー	ベー	チュー	デー	エー	エフ	ゲー	ハー	イー	ジュー	ケー	エル
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
エム	エン	オー	ペー	クー	ルー	エス	テー	ウー	ヴィー	ワー	エクス
M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X
ヤー	ゼット										
Y	Z										

その後の資料では、1937（昭和12）年の内閣訓令でも、1954（昭和29）年の内閣訓令でも、「アルファベット」そのものの読みは示されていない。

また、1950（昭和25）年の「改訂ローマ字教育の指針」の「読み方の指導」にも個々の「アルファベット」の読みを示す一覧はない。いくつかのローマ字の指導方法が説明されている中で「たとえば、ジー（g）、ユー（u）、アイ（i）、エー（a）というような文字の呼び名（以下略）」とあるのみである<sup>17)</sup>。

### 1-7-2 英語教育の場合

本稿で問題にしているのは「外来語」としての「アルファベット」の語形である。英語教育で教

えるのは、英語としての発音であり、外来語としての発音とは異なる。しかし、日本人が「アルファベット」に触れる機会は、まずローマ字教育と英語教育である。ローマ字教育だけでなく、英語教育ではどのように教えているのか、ということも参考として示すことにした。

英語の学校教科書では、「アルファベット」の名前をカタカナでは説明していない。

ただし、インターネット上には、初めて「アルファベット」に触れる小学生向けに、カタカナで「アルファベット」の名前を示した一覧もある。例えば「ちびむすドリル英語」（<http://eigonurie.com/>）では次のようになっている。

エイ、パイ、スィー、ディー、イー、エフ、ジー、エイチ、アイ、ジェイ、ケイ、エル、エム、エヌ、オウ、ピー、キュー、アー、エス、ティー、ユー、ヴィー、ダブリュー、エックス、ワイ、ズィー

「R」を「アール」とせず「アー」としたり、「C」「Z」を「スィー」「ズィー」とするなどカタカナで英語の発音を示すための工夫が見られる。

また、英語の入門書では、わかりやすく原音の発音を伝えるため、カタカナ表記を工夫したものがある。例えば、大伴峻（1938）では、「H」は「エイチ」、「I」は「アイ」、「K」は「ケイ」、「M」は「エム」、「O」は「オウ」など、最後の母音をはっきり発音させない工夫がされている<sup>18)</sup>。

## 1-8 議論

各委員からは、表1で示した「アルファベット」の外来語としての読みについての意見があった。特に、表内で無印とした、放送では推奨しない発音についてのほか、表に示されていないが、実際は使われているのではないかと思われる発音について指摘があった。

笹原宏之委員：「O」については、英語的な発音である「オウ」は、本当に一般的に全く使われていないだろうかという点が気になった。また、「W」について、俗用ではあるが「ダブルベッド」を「Wベッド」のように書くことがある。こういう表記を放送で使うことがもしあれば、「ダブル」という読みも出てくるかと思う。また、URLの「www」

やプロレス団体の「WWWF」などは「ダブリュダブリュダブリュ」と発音することが多いように思う<sup>19)</sup>。「C」については、アナウンサーが「スィー」と発音していることがときどきある<sup>20)</sup>。

清水義範委員：いろいろな読みがあるなかで、NHKとして、この読みをとると決めて、それを運用すればいいだろう。ややこしいのは「いやらしい人」という意味で言う「Hな人」の読みだろう。この語は、昭和の初めの女学生の流行語で、日本語である。この場合は「エッチ」でいいだろう。そのほかの「アルファベット」は「エイチ」になるということでもいい。

井上由美子委員：少し迷うのは「H」である。意外と「エッチ」と言っている。「HB」なども「エッチビー」と言うし、「ADHD」も「エディーエッチディー」と言っている。「エイチ」と言っているつもりでも、「エッチ」と言ってしまうことは多いと思う。「エイチ」のみに統一しなくてもいいのではないかと思った。

荻野綱男委員：今回は日本語の外来語としての読み方を決めるということなので、表1のとおりでいいだろう。1文字1文字を読むのにはこういう読み方でいいと思うが、つながった場合には語としての読みが起り、読み方が変わるのではないか。その点が問題になるかもしれない。それは語の読みということで、別途検討すればいいだろう。「Z」について、「ゼット」というのが一般的な読みであり、日本語としては「ゼット」で問題ない。最近「ズイー」の発音をする語が若干出てきたように思う。そういう意味で日本語としても変わりつつあるのかなと思う。そういう発端が起こっているように感じた。

青木奈緒委員：この問題は、NHKとしてはこうすると決める、ということでもいいのではないかと思う。表1の中で私の読み方とは違うのかもしれないと思ったのは「J」。これをぱっと見ると「ジェー」とは言わずに「ジェイ」と言うだろうと思った。

町田健委員：表1に示した形でいいだろう。自分が考え、やってきたものと同じであり、問題ないと思った。高校時代、「D組」だったが、「B組」との区別もあって、「デー」と言うようにしていた。聞くときには「B」と「D」は混同しがちなのでこういう問題もあるのではないかと思った。

井上史雄委員：結論から言うと、もっとゆるやかに考え、これまでどおり、現場で判断するというのがいいのではないか。表1にある「A」「J」「K」の「エイ」「ジェイ」「ケイ」については、△になっているが、◎でいいだろうと思う。ゆるやかな形で、「アルファベット」の読みの現状はこうだということを示し、そのうえで、複数の読みがある場合は、番組ごとに適切なものを採用していい、という形にするのがいちばん楽だろう。例えば、「NHK」をどう発音するのか。前川喜久雄（2005）によれば、「エヌエチケー」と読む人が多かった<sup>21)</sup>。一方、特許庁には、「エヌエイチケイ」「エヌエッチケイ」のカタカナ表記で登録されている<sup>22)</sup>。このほか、国際放送やディスクジョッキーによる発音の場合、「エン [en] エイチケイ」といった英語的な発音が行われることがある。こう考えると、NHKについては、4種類の読みが行われているということになる。また、「V」の「ブイ」という発音は外国人には通じない。「ヴィー」と言わないといけな。しかし、日本人向けには「ヴィー」と言うと「ビー」と聞き違えるという問題がある。「Z」も同様である。学校教育でも、「ABCの歌」を英語ではなく音楽の時間に習ったとき、「V」の発音は「ブイ」だった記憶がある<sup>23)</sup>。われわれは、場面によって「アルファベット」の読み方を使い分けている。ある場面では「エー」「ケー」「ジェー」や「エヌエチケー」と読み、ある場面では英語的に「エイ」「ケイ」「ジェイ」や「エン [en] エイチケイ」と読む。こうした場面による使い分けのほかに、語による違いもある。例えば「AAA」（ホテルランクを言うことば）を発音する場合に、「エーエーエー」にはならないだろう。「エイエイエイ」になるのではないか。実際の発音はどうなのか、いろいろな場面を考えて、「アルファベット」の発音のレパートリーとして、ある程度多く認めるほうがいい。

## 2. 「アルファベット」を使った省略語を画面に示す場合どのように示すべきか（例：vs. か vs か）

### 2-1 問題点

1章で取り上げた、個別の「アルファベット」の読みのほかに、用語班に問い合わせの多い問題として「アルファベット」を使った省略語をどう

示すかということについて考えたい。特に問い合わせの多い「vs.」(versusの省略表示)と「a.m.」「p.m.」(時間表示に使う表示。ante meridiem, post meridiemの略)を放送の画面にどのように表示するのか、という問題である。

放送用語として、問題点が2つあると考える。

#### 問題点①

番組で「アルファベット」による省略表示を使ってもいいのか？

#### 問題点②

使う場合は、どのように表示すればいいのか？

## 2-2 これまでの経緯と用語班の考え方

それぞれの問題点について、用語班としては次のように考え、問い合わせに答えている。

問題点①については、『ハンドブック』の「a.m., p.m.」の項目に「放送の時刻表示は、原則として「午前」「午後」とする。a.m.やp.m.はなるべく使わない」とある。「vs.」について書いているものはないが、「a.m.」「p.m.」同様、「vs.」を使わず、まずは「対」を使うことを検討するようにすすめている。

問題点②は、省略表示を番組で使うことにした場合、どのように示すべきかである。こうした「ア

ルファベット」の省略表示は、英語での示し方、日本での示し方が違う場合が多い。「vs.」の場合は、「英和辞典」の見出しでは「vs.」(ピリオドがつく形)が示されるが、日本では一般に「vs」(ピリオドがつかない形)が使われる。また「a.m.」「p.m.」は、英語では「10:00 a.m.」と示すが、日本では「a.m. 10:00」といった表示も使われることが多い。放送で使う場合には、日本で使われている表示方法、つまり、「vs」(ピリオドがつかない形)、「a.m. 10:00」(「午前」を単純に「a.m.」に置き換えた形。また、大文字「AM」「PM」が使われることも多い)ではなく、外国語の表示ルールにのっとって使うことをすすめている。

日本で使われる「俗用」を使ってまで、なぜ、わざわざ「アルファベット」で示さなくてはいけないのか、という疑問を感じる視聴者が一定数いることも考えてのことである<sup>24)</sup>。

## 2-3 放送現場の意見

2章の問題については、「放送用語委員会」に先立って2月14日に行われた「放送用語小委員会」で、放送現場の意見を聞いた。「vs.」について、「.」をつけると、対決感が出ないといった意見が多かった。また、「vs.」を外来語と同じように考え、日

表4 「vs.」「a.m.」「p.m.」の国語辞典の立項

見出し	辞書	表記	掲載
ブイエス・バーサス 両方見出し	日国	vs	「ブイエス」の見出しには表記「vs」あり。「バーサス」の見出しには表記情報がなく、語釈に「略号VS」とあり
	大辞林	ブイエス：vs., VS, バーサス：versus	「ブイエス」の立項には、表記情報はあが語釈がなく、「⇒vs. (ABC略語)」とある。「バーサス」は、表記は「versus」。語釈があり、語釈に「vs.またはv.とも」という表記情報もあり
ブイエス	岩波	VS, vs.	
	新明解	vs	
	新選	vs.	
主見出し：バーサス、 空見出し：ブイエス	三国	VS, VS.	どちらの見出しにも表記情報はあり

見出し	辞書	表記	掲載
エーエム、 ピーエム	日国	A.M., a.m., P.M., p.m.	「a.m.」の語釈に「正式には「7 a.m. (午前7時)」のように、時刻のあとに記す」とある。また「p.m.」の語釈には、「時刻を示す数字のあとに添えて「午後…時」の意を表す」とある
	大辞林	A.M., a.m., P.M., p.m.	
	明鏡	A.M., a.m., P.M., p.m.	「普通、9:00 A.M.のように使う」「普通、6:00 P.M.のように使う」とある
	新選	a.m., p.m.	
	新明解	AM, PM	「8:30 a.m., 開店10A.M.」「1:30 p.m.上映 [「p.m. 1:30」とするのは、日本での表記習慣]」とある
	三国	a.m., p.m.	「8:30 a.m. [AM 8:30などとも]」「8:30 p.m. [PM 8:30などとも]」とある

本語化した形で表示してもよいのではないかと、という意見もあった。

なお、「a.m.」「p.m.」については、「午前」「午後」を使えばよいといった意見が多かった。また、使う場合でも「10:00 a.m.」と英語の表示をしたほうが効果が出るという意見も聞かれた。

## 2-4 一般での使用

国語辞典では表4のとりの掲載である<sup>25)</sup>。

なお、『新英和大辞典第6版』（研究社・2002）および『ランダムハウス英和大辞典第2版』（小学館・2002）を調べたところ、「vs.」はピリオドのある小文字で立項があり、ピリオドがない形や大文字は語釈にも見られない。一方、「a.m.」「p.m.」は、ピリオドがない形や大文字も見出しにたてるなど、扱いが異なる。『新英和大辞典』には「a.m.とp.m.はam, A.M., A.M., AM, pm, P.M., P.M., PMとも書き、どちらも時刻を表す数字または数詞の後に置く」と説明がある。

## 2-5 議論

2-2に示したとおり、放送で「アルファベット」の省略語を使う場合は、英語での示し方に合わせて使ったほうがよいと答えているが、実際には、2-3に示すような放送現場の意見や、2-4に示すような国語辞典の掲載もある。用語班としてどのように考えればよいのだろうか。議論した。

青木奈緒委員：「vs」は、英語で使う場合に合わせて、日本語で使う場合も「点」をつけなくてはいけない、とは考えなくてもいいだろう。1文字減らしたいというのであれば、点なしでかまわないのではないかと思う。「a.m.」「p.m.」については「午前」「午後」に直すという方法でいいだろう。井上由美子委員：「a.m.」「p.m.」については、「午前」「午後」以上の意味はないので、そのとおりでいいと思う。「vs」は難しい。『VS嵐』といった番組名は点が見つからない<sup>26)</sup>。「vs」は日本の慣用語である。「巨人対阪神」と書いてあるよりは「巨人vs阪神」としたほうが見たいという気がする。日本語として扱っていいだろうと思う。

笹原宏之委員：漢字の「対」でよいのではないかと思う一方で、漢字が連なることで埋没してしまうため、記号を使いたいという気持ちもわかる。

また、「対」ではなく「vs」を使うのは、対決しているという雰囲気を出したいということもあるのだろう。ピリオドの有無のほかは大文字を使うか、小文字を使うかの問題もある。英語から取り込んで、日本語として使っていると解釈すれば、どの表示でもよいのだろう。ただしこうしたものに対しても英語を規範として考える人はいる。「クリスマス」も「X'mas」と書くと、本来、欧米にもあった表記なのだが、日本だけで行われているからよくないというクレームを入れる人もいる。英語のローマ字を使ったからには現代の英語によるべき、という主張を完全には否定しにくいところもある。ピリオドがないほうが雰囲気が出るという意識がより広まることを待ちたいと思う。井上史雄委員：発音と表記を分けて考えるべきだと思う。「24H」と書かれているのをどう読むだろうか。「24時間」と読んでいるのではないか。メモで「TELありました」と書くことがある。これを「あ、テルあったの?」とは言わない。「あ、電話あったの?」と言うだろう。「アルファベット」（漢字もそうだが）は、意味が伝わることが重要であって、それをどう読むかは別である。「VS」と書くことと、それを「バーサス」と読むのか、「ブイエス」と読むのか、「対」と読むのかは別問題だと思う。NHKはカタカナについて「表音一致」（発音と表記を一致させる）という原則を持っているが、画面でどう書くかということと、アナウンサーがどう読むかというのは、分けて考えていい。「VS」の書き方についてだが、外来語をカタカナではなく、「MAP」「BOX」と「アルファベット」で書くことも多い。「渋谷MAP」「回収BOX」のように漢字と「アルファベット」で書くこともある。しかも大文字で書くことが多い。そう考えると、「VS」は大文字でいいということになる。ピリオドをつけるかどうかは、「USA」のように略語でもピリオドをつけないものも多い。こうしたことから、「VS」は略語だからピリオドをつけるべきだ、という論は考慮しなくていい。画面で「VS」と書くことは許される。「対」を使う場合に「巨人 対 阪神」と分かち書きをされているのであればわかりやすいが、分かち書きがされず「巨人対阪神」となると伝わりにくくなる。「VS」としたほうがはっきりするだろう。

清水義範委員：NHKとして決めてしまえばいい



ことだと思う。「vs.」の「点」はなくてもいいと思う。ほかの語もつけないことがある。省略してあるのだから、点をつけなくてはいけないというのは、英語を知っている人の常識であって、日本人が使うのに、いちいちそれにしぼられなくていいのではないだろうか。

**荻野綱男委員**：「[アルファベット]を使った省略語を画面に示す場合」とある。しかし、これは話題が違うのではないかと思う。つまり、「アルファベット」を使った省略語、と一般化する必要はあまりなくて、「vs」なら「vs」ということばについてどうか、「a.m.」「p.m.」ということばについてどうか、ということを考えればすむ話だ。もしNHKの方針があっても、それを「vs」や「a.m.」「p.m.」以外の語に適用させてはいけない。「vs」という表記については、それがどれくらい一般化しているのかということ調べればいい。テレビに限らず日常生活で「vs」ということばを見かけることが多くなったので、そういうことばを使ってもいいのではないかと思う。ピリオドについては、つけてもつけなくてもいいと思う。テレビの画面で見ても小さくて見えない。見やすいほうがいいだろう。

**町田健委員**：本当はなるべく「アルファベット」は使わないほうがいいと思う。「対」というのでわかればそのほうがいいだろう。ラテン語から英語の「versus」になって、それを省略しているということなので、本来はピリオドをつけたほうがいいと思う。しかし、なくてもわかる。一方、「a.m.」「p.m.」については、これはピリオドがあったほうがわかりやすいということだろう。要するにわかればいい。

1章で示した議題、2章で示した議題ともに、この意見を受けて「用語の決定」を行うものではない。事務局が今後再検討し、放送現場からの問い合わせを受けた際の資料としたいと考える。

なお、1章の「[アルファベット]を外來語として読む場合の発音」については、どのような発音の幅があるのか、実際の発音を調べるなど、関連の資料を収集していきたいと考えている。

山下洋子（やました ようこ）

注：

- 1) 『ハンドブック』p.221に「原則として発音と表記は一致させるものとする」とある。「外來語の表記」(内閣告示)にも、発音と表記の関係について述べた部分があり、『日本語大事典』(朝倉書店・2014)の「外來語」の欄に、次のように説明されている。「(外來語の表記の)第二表細則2は、外來音ウイ、ウエ、ウオは、第二表の仮名を用いて「ウイ」「ウエ」「ウオ」と表記できることを述べたものだが、これらの音は、人により語によって、ウイ、ウエ、ウオの語形を用いることもあろう。原音に近い語形を用いる人、あるいはそのように表記したい場合は「ウイ」などの表記を行うことができ、たとえば、「ストップウォッチ」と書くことができる。この場合ウオの語形を用いる人は「ウオ」と書くことができる。」
- 2) 『ハンドブック』p.229参照。
- 3) 「B」を「ビイ」と表記する例は、NHKの広報番組『BS コンシェルジュ』(総合テレビ・毎週金曜日午後0時20分～)で「Bコン(びいコン)」という略称として出てくる(筆者が番組を視聴し確認)。「外來語の表記」(内閣告示)では、「長音は、原則として長音符号「ー」を用いて書く」となっており、例として「エネルギー」が示されている。
- 4) NHKの外來語の表記は、『ハンドブック』p.231に示している「別表 外來語に使うカナと符号」の範囲で行っている。この表には「スイ」と「ズイ」は含まれていない。場面や人によっては、「スイ」「ズイ」の発音が出ることもあるが、一般的な発音とは言いにくい。なお、「外來語の表記」(内閣告示)では、「留意事項その1(原則的な事項)」において「特別な音の書き表し方については、取決めを行わず、自由とすることとしたが、その中には、例えば「スイ」「ズイ」「グイ」「グエ」「グオ」「キエ」「ニエ」「ヒエ」「フヨ」「ヴォ」等の仮名が含まれる」となっている。
- 5) 注2に同じ。
- 6) 原音 [va·vi·v(u)·ve·vo] は「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」と発音・表記することを原則に、原音に近く書き表す場合は「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」と書いてもよいことにしている。ただし、「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」の発音は「バ、

ピ, プ, ベ, ポ」で差し支えない(『ハンドブック』pp.223～224参照)。日本語では[vi]と[bi]の発音を区別せずに、いずれも[bi]で発音されることが多いためである。

7) 注4に同じ。

8) 「アルファベット」を使った語の読み方については、『放送用語並びに発音改善調査委員会議案(昭9)』(部内資料)の1934(昭和9)年4月11日の部分に、いくつか記されている。例えば、「ABC」には「エービーシー」と読みがつけられている。また、「各種の記号としてのローマ字の読み方は必ずしも統一されていないが、それについて調査する必要があると考えられる」とされ、「不統一な例」として「JOAK ジェイオウエイケイ」「IWW アイダブリューダブリュー」「GPW ゲーペーウー」「AO アーオー(薬名)」があげられている。なお、「JOAK」はNHK東京第1放送のコールサイン(無電局・放送局の電波につけられた呼び出し符号(『大辞林』))である。このコールサインについては、『調査月報』(1929.1)付録の東北支部「アナウンサー参考難解地名人名字彙」に、現在のNHK仙台放送局のコールサイン「JOHK」の読み方の注意が記されている。例えば、「J」は「我国人は[ei]が[ee]或は[ē]の如く引き伸ばらるる傾があるから[dzei]の[i]の失わぬように十分注意せねばならない。「O」は、「本邦人には[oo]或は[ō]と只[o]を引伸して発音する傾きがある。[u]を落してはならない。「H」は「初めの[ei—]が只[エー]と延ひないことが肝要で、必ず[i]を入れることである。「K」は「[ei]が只[エー]と伸びない事が大切である。「以上の注意が守られ、練習を重ねることが励行されて、初めて英国の「アンナウンサー」そっくりのJOHKの発音は出来ないにしても、之に近似のものは得られるであろう」と書いている。昭和4年当時はコールサインをできるだけ英語の原音に近く読まなくては行けないと考えられていたようだ。戦後になっても同様で、1947年、1952年の放送用語委員会で、「コールサインの発音(NHK JOAK)」について、「コールサインは呼出符号なのでたびたび出てきて、相当大切なものであるから、なるべく原音に近く発音してほしい」「[NHK]の発音はなるべく

[en …]と発音すること。×[enu …]といった内容が話し合われている(以上、原文で使われていた旧かなづかいや旧字体は現代かなづかいや常用漢字表の字体に直した)。

9) 現在のコールサインの発音とは異なるが、『生きている日本語 方言探索』(柴田武・1988)には、「NHKのコールサインは、大阪第一放送が、JOBK、函館第一放送が、JOVKである。だから、放送の場では、BとVをはっきり発音し分けなければならない」とある。コールサインは原音に近く発音するという考え方から、[bi:]と[vi:]とで発音し分けるということである。

10) NHKのニュース原稿は、NHKの部内データベースで調べた。

11) Eテレで、2つの番組を放送している。『手話ニュース』月曜日～金曜日午後1時～午後1時05分、土曜日・日曜日午後7時55分～午後8時。『手話ニュース845』月曜日～金曜日午後8時45分～午後9時

12) 1986(昭和61)年12月10日から1988(昭和63)年12月9日までに行われた国語審議会。くわしくは、文化庁・国語施策情報第17期国語審議会 [http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/17/index.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/17/index.html)を参照のこと。

13) 調査した辞書は、次のものである。

『日本国語大辞典第2版』(小学館・2001)、『大辞林第3版』(三省堂・2006)、『明鏡国語辞典第2版』(大修館・2010)、『岩波国語辞典第7版新版』(岩波書店・2011)、『新選国語辞典第9版』(小学館・2011)、『新明解国語辞典第7版』(三省堂・2011)、『三省堂国語辞典第7版』(三省堂・2014)、『新明解日本語アクセント辞典第2版』(三省堂・2014)。それぞれ『日国』『大辞林』『明鏡』『岩波』『新選』『新明解』『三国』『新明解アク』と略記した。

14) 調べた辞書の中で「H」の読みを『三国』だけが「エイチ」を主見出しにしている。初版から第7版まで、どのように変化しているかを見る。

初版(1960):掲載なし

2版(1974)、3版(1982):エッチ

4版(1992)、5版(2001)、6版(2008):

エッチ(エイチ)

7版(2014):エイチ(エッチ)

意味は「アルファベットの読み」ではなく、2版から5版まで「えんぴつの芯のかたいことをあらわす記号」の意味で、6版には、この意味に「ヒップ (=しりまわり) の略字」が加わる。7版は、さらに「(看板などで) 時間」が加わる。なお、2版から7版まで、別項目として「エッチ」の立項があり、これは、俗語の「変態」の略である。

15) 中村通夫 (1948) 『ローマ字教育の指導』(川田書房)。また、『小学校国語科教育概説 (近畿教育大学国語教育学会編)』(明治図書出版・1960)には、「Aの発音はエイ・ローマ字ではアと読むと教え、Eをイイと発音して、ローマ字ではエと読むと教えるのは混乱するばかりである」。このように「アルファベット」の個別の読みを示さずにローマ字を教える方法が推奨されている。

16) 『ローマ字読本』(佐伯功介 (1948)) では、ここに示したものと一部が異なるローマ字の読み一覧が示されており、「これは、文部省のローマ字教育協議会の専門委員会を選んだものである」(原文はローマ字)とされている。違う部分は次のとおりである。「C」は「sê」、「J」は「yô」、「K」は「kâ」、「R」は「râ」、「V」は「bui」、「X」は「ekkisû」。また、こうした「アルファベット」の名前を「日本風」と説明するものもある(『新定ローマ字読本』(江口喜一 (1947))。ただし「ローマ字教育協議会」で示した「ローマ字教育の指針」などの資料には、こうした一覧は見あたらなかった。

17) 1924 (大正 13) 年にローマ字研究会が発行した『模範独習 ローマ字の先生』では、「ABCの呼び方」が次のように英語の読みに近い形で示されている。

a エー b ビー c スイー d デイー e イー  
f エフ g ジー h エイツチ i アイ j ジエイ  
k ケイ l エル m エム n エヌ o オー  
p ピー q キュー r アール s エス t テイー  
u ユー v ヴイー w ダブルユー x エツクス  
y ワイ z ゼット

(「キュー」は原文では「p」となっているが、誤植と考えてここでは「q」とした)

18) 英語のアルファベットの読みは、幕末からさまざまに工夫され、表記されてきた。例えば、福沢諭吉の『増訂華英通語』(1860) (英語と中国語の対訳単語集に、福沢諭吉が日本語読みを

カタカナでつけたもの) には、次のように発音がつけられている。外来音として、当時の日本人には発音しにくかった「ディー」「ジェー」「ティー」が「ヂー」「ゼー」「チー」となっているが、「v」に「ヴ井」を使うなど、原音の発音をカタカナで表現しようとする工夫が見られる。なお、下記のルビでは小書きで示せていないが、「r」は「アル」、「v」は「ヴ井」、「y」は「ウハイ」、「z」は「セツ」と一部が小書きされている。

エ ビー シー デー イー エフ ジー エーチ アイ ゼー ケー エル エム エヌ  
a b c d e f g h i j k l m n  
ラー ビー キュー アル エス チー ユー ヴ井 ダブルユー エクス ウハイ セツト  
o p q r s t u v w x y z

19) 『新明解アク』では「WC」の発音として「ダブリューシー」のほかに「ダブリュシー」も示している。

20) NHK では 1981 年にアルファベットの読み方について、大学生と有識者に調査を実施した。「C」の読み方で望ましいと思う読み方を選んでもらった。

Cの読み方	有識者	大学生
シー	36%	27%
スイー	34	48
どちらでも	9	10
場合による	19	15

有識者は、「シー」、大学生は「スイー」が多い結果である(石野博史 (1981))。NHK では外来語のカタカナ表記に「スイ」というカナは使わずに「シ」を使うことにしている(例:ディズニーシー、シーズン、シスターなど。注4に説明あり)。発音と表記を一致させる原則から考えると、「スイー」ではなく「シー」と発音することが原則である。これは「ジ」と「ズイ」についても同様である。なお、外来語以外で「シ」が「スイ」に近い発音になる現象が指摘されており、放送では、和語や漢語の場合は「スイ」の発音を使わないように注意されている。例えば、『NHK 新アナウンス読本』(1980)に、共通語の「シ」は [ʃi] であり [si] ではないことを意識するようにと説明がある。「(略)もし、このシの音を [ʃi] でなく [si] の音で、発音するとスイという音になります。(略)共通語の発音になりません。最近若い人の間では、この [si] の音に発音する人が多くなる傾向がありますが、注意して下さい」。

21) 「日本語話し言葉コーパス」に現れる「NHK」の

発音は、「エヌエチケー」が約70%、「エヌエーチケー」が約13%、「エヌエッチケー」が約3%という結果になった（前川喜久雄（2005））。

- 22) 特許情報プラットフォーム <https://www.j-platpat.inpit.go.jp/web/all/top/BTmTopPage> で商標「NHK」を検索した。
- 23) 学校教育では「The Alphabet Song」や「ABCの歌」として英語や音楽の授業の中で教えることがある。現在の英語の学校教科書には、楽譜の掲載が確認できなかった。過去のものでは『Sunshine ①』（2005年検定、2006年使用・開隆堂）に掲載があったが、発音は示されていない（「W」のみ「Double U」とある）。音楽の教科書では、『中学生の音楽1』（教育芸術社）の指導書に教師個人のメモ書きがあり「原音に近く」とあった。また、『学習評価の実際第3巻（学習教育研究会編）』（明治図書出版（1953））に、「「ABCの歌」の学習評価例」があり、「アルファベットの発音は正確であるか」という点が評価ポイントとされている。教科書ではないが、「ABCの歌」の歌詞をカタカナで示している資料がいくつかある。雑誌『中学英語 1st year』（研究社出版（1952年6月号））では「A B C <sup>エイ ビー スイー</sup> D E F G H I J K L M N O P <sup>ディー イー エフ ジー エチ アイ ジュー ケー エル エム エヌ オウ ビー キュー アー エス ティー ユー ヴィー ダブルユー エックス ワイ スイー・ゼッド</sup> Q R S T U V W X Y Z」の読みがつけられている。『楽しい音楽 6年生』（岩崎書店（1963））では「A B C D E F G <sup>エイ ビー スイー ディー イー エフ ジー</sup> H I J K L M N O P Q R S T <sup>エイチ アイ ジュー ケー エル エム エヌ オー ビー キュー アル エス ティー</sup> U V W X Y Z」<sup>ユー ヴィー ダブルユー エックス ワイ スイー</sup>と同じ曲でも、少し示す発音が異なっている。「V」については「ヴィ」または「ヴェー」となっている。このほかの「C」「D」「J」「Q」「T」「Z」は「スイー」ではなく「スイー」などと小さい文字で示されているが、「V」は「ヴィ」「ヴェー」とはなっていない。「ヴィ」と2拍で発音させているように読める。
- 24) NHKの部内資料で、2017年8月の報告として、視聴者から、番組で「AM 5:00」と表示していたのは「5:00 AM」の間違ひではないか、という問い合わせがあった、というものがある。
- 25) 注13に示した辞書のうち、『新明解アク』以外を調べた。
- 26) フジテレビ・木曜日午後7時放送の番組。番組のウェブサイトでは『VS嵐』。新聞のラジオ・テレビ欄は、新聞社によって表示が異なってい

る。調べた新聞は6紙。そのうち朝日新聞、日経新聞は『VS嵐』とし、毎日新聞、読売新聞、産経新聞、東京新聞は『VS嵐』。新聞のラジオ・テレビ欄は必ずしも放送局が示したとおりの表示にはしない。それぞれの新聞社の表記のルールにのっとって書き直す場合がある。

## 引用文献：

- ・『調査月報』（1929.1）「調査月報附録」第2巻第1号「アナウンサー参考難解地名人名字彙」
- ・石野博史（1981）「「順風満帆」をどう読みますかー有識者アンケート（第2回）の調査結果ー」『文研月報』第31巻8号通巻363号
- ・文部省編（1960）『小学校ローマ字指導資料（初等教育研究資料第24集）』（教育出版）
- ・「羅馬字書方調査報告」『ローマ字問題資料集第1集』（国語シリーズ23）1955収録（文部省）
- ・大伴峻（1938）『わかりやすい英語自習の友』（光学館）
- ・前川喜久雄（2005）「NHKの発音」『情報通信ジャーナル』23（5）
- ・柴田武（1988）『生きている日本語 方言探索』（講談社学術文庫）
- ・日本放送協会編（1980）『NHK新アナウンス読本』（日本放送出版協会）

### 第1413回放送用語委員会（東京）

【開催日】平成29年2月24日（金）

【出席者】青木奈緒氏、井上史雄氏、井上由美子氏、荻野綱男氏、笹原宏之氏、清水義範氏、町田健氏、鈴木郁子 NHK放送文化研究所長 ほか